

砂漠の雪

infinity cross premium



砂漠の雪

-infinity cross premium-

三根崎優介

illustration/夜月星

序章

——それは、酷く不気味な町だった。

立ち並ぶ乳白色の建物は全て窓を固く閉ざし、大都市並の広さを誇る大通りには人どろろか野良猫さえも見つからない。その中を黄金色に輝く風が吹く、砂を巻き上げる風の音、それだけが無音の町に彩を落とす、そんな静かで不気味な世界。

無理も無い、と男は思う。立地条件が悪過ぎる、極普通の町ならともかく其処は砂漠——それも、死の砂漠だの、帰らずの砂界だの、近寄り難い通称で知られた砂漠を気が遠くなるほど歩き続けた先にある、存在さえも知られぬ町だ。

仕方が無いと頷ける。窓は砂避けの為に閉じられ、人は光を拒み昼を嫌う、昼と夜で姿を変える町もある、砂漠の町とは得てしてそういう物なのだ、それを気にしてはきりが無い。

……それでも、その全ての要素と一切関係の無い所から浮かぶ感情が警笛を鳴らす。理由などは無く——この町を不気味だと感じたのだ。

「助かった、と思いたい所だが」

「……」

返事は無い、その反応にも慣れているのか男は気にせず言葉を紡ぐ。

「まずは宿……いや、水と食料が、急がねばな」

「……」

男は外衣の隙間から町並みを眺め、安堵の溜息を一つ漏らした。町は相変わらずの無音を返す、最も、出迎えがあるとも、歓迎されるとさえも思つては居なかつた。ただ水と食料さえ手に入ればそれでいいと……。

「どうした？ 水に食料が手に入らず、何とか言つたらどうだ」

「……」

「……お前まで無言になると会話にならん」

男は町並みを見上げて、一瞬だけその顔——隙間から覗く口元をしかめる。恐怖は無い、得体の知れない不気味さ、そうとしか表せない物が、入り口から此方へと漂い揺れる。

……まあ大丈夫だろう。男は樂觀的に結論付けると、町へと足を踏み入れた。何かあつたとしてそれに惑わされるほど自分達とて弱くは無い、大抵の事柄なら問題にすら成り得ない、過信で無く確信を抱きながら苦笑。自分で言うのもなんだが出鱈目な一行だ、そんな風に思いながら、男は自らの仲間を振り返る。

砂避けの外衣で顔を覆つた仲間達、一人は人並みの背丈、もう一人は子供並かそれ以下、傍目には心持たないと思えない一人だが、その実力を知る者からすればこれ程頼れる仲間には居ない、それが男の抱く仲間への評価だ。

「色々と苦労はしたがもう少しだ、お望みの食事でありつけるぞ」

「うう……飯……」

「飯だ、これだけの町ならオアシスもある、水も飲めるぞ」

「水……め、し……」

「っ、おい！」

砂を撒き散らしながら倒れる男、それが気絶なのか、或いは永遠の眠りなのか、慌てて駆け寄り確かめれば弱々しくも息はある。

「無理も無い、か……俺が持つ、お前には無理だろう？」

「……」

「大丈夫か？」

「……大丈夫」

透き通るように響き渡る女の声色——三人の中で一番小さかった者の声、その声に弱々しさを感じ、男は一瞬不安を抱く。

——（この程度で弱るはずなど無いのだが。）

「……とりあえず、何はともあれ町だ、存分に休養を取るとしよう」

「……」

答える者は居ない、承知の上でも中々に寂しい物だ、そんな風に考えながら、男は町へと歩き出す。

音のしない町、風の音色が響く町、それは幻想的でもあり、情緒的でもあり――やはり、不気味
だった。

第一章 砂漠の臍

ネヴェエラとは古代言語で臍を意味する。『世界の果て』と称された砂漠を突き進み数ヶ月、ようやく辿り付いたその町がサン・ネヴェエラという名であるとは知った時は絶望感を覚えたものだ。ちなみにサンの意味は砂漠、要するに砂漠の臍、詰まるところ此処が中心で、この先へと進むのなら前の旅と同等かそれ以上の道程を歩む必要がある、という事だ。

未来について考える事は絶望しか生み出さない、目の前に転がる事柄のみを考えてこそ一流だ。アリシアは師が残した言葉を回想しながら、控えめに溜息を吐き出した。

「本当に先生は凄いです、流石でした！」

「ん……ああ、そうですね」

興奮した声に冷めた相槌を打ちながらぼんやりと町並みへ目を移す。立ち並ぶクリームの家並み、漂う黄砂とそれを塞ぐための板切れ、窓を覆うそれが町全体に寂しさを生み出しているように感じながら、羽織った衣を握り締める。砂が入ると厄介だ。

「診断したその日の内に特効薬を精製するなんて並じゃないです、驚きました」

「元から並のつもりはありません、私の手に掛ければ一瞬ですよ」

当然、と態度も合わせて言い捨てる。アリシアは興味無さげに少年の姿を見下ろすと、思慮の足りて

ないその姿に有り体な苦笑を返してやる。

興奮冷めやらぬ様子で騒いでいる少年はウイルと言う、真つ白に輝く髪の毛と、透き通るような肌の色、暑苦しいのが嫌なのか砂避けの外衣から顔だけを出して……最も、顔を隠すための外衣なのだが、ともあれ純白と言つても過言では無いその容姿は、どちらかと言えば黒に近い外衣も相成つて、その瞳同様に宝石のような輝きを見せている。

「ウイル、砂が目に入りますよ」

「え？ ああ、だつて暑苦しいですもの、我慢できませんよ」

「やれやれ……まあ、今日は特に暑いですが」

同意の言葉を苦笑に乗せて思い返す、先ほど診療した人々を、この町に蔓延していた熱病を……気温が上がる前に処置できた事は幸いだ、そう思う。

アリシアは名医だった、これは関わった人間の他称であり、それと同時に自称である。幼少より叩き込まれた医療の腕、それを患者以上に彼女自身が信じており、何より誇りに思っていた。それ故彼女は旅に出た。何処かの患者を救うため、まだ見ぬ病を癒すため、様々な目的を内包する流浪の旅路、放浪の旅に出るから彼女の理念は変わらない。常に冷静、常に的確、これも他称であり自称、アリシアには自分自身が混乱する姿が想像できず、想像したいとも思わない。

対して、ウイルは真逆と言つても過言では無い程だった。常に興奮、時に混乱、考えなしの行動は常に大混乱を巻き起し、事態を最悪の方向へ持ち運び……稀に、全てを最良の方向へと導いた。

安定性が無いのだ、アリシアはそんな風に分析する。出会って間もない頃は自分も踊らされていたが、もう慣れた。合理的でない行動さえも、今のようには苦笑を浮かべて見守れる……いや、今日ばかりは無理かもしれない。

——まあ、たまには思慮に欠けた行動と言っのも一興か。

咎めるでも、戒めるでも無く、アリシアはそんな風に考えて、頭を覆う外衣を下ろした。

「……確かに、良い風ではありますが」

「ですよ、随分涼しく感じますよ」

「砂が厄介ですけど、多少なら耐えましようか」

アリシアは舞い上がりそうになる髪を抑えろと、控えめな微笑を空へと向ける。若草の髪色、整った目鼻、態度や口調にそぐわぬ女性らしさを帯びた横顔、外衣を纏った様さえ映える。

「それにしても、活気の無い町ですよ」

「人の訪れぬ最果て、それも疫病の蔓延した町に活気などあるわけがありません」

「それはそうですね……本当、随分と遠くまで来ましたね」

ウィルは懐かしむように背後を振り向き、なんとも言い難い表情を空へと向けた。そんなウィルの様子を眺めながら、アリシアもぼんやりと回想する。

事の始めは数ヶ月前、ラトーフエスタという町に居た難病の少女を助けた事が始まりだ。それまで大陸中を巡り、片っ端から治療を続けて早二三年、大概の病は治しつくしたと自負した所での遭遇だ。ラト、

そしてフマタ、それぞれ古代言語で『終わり』と『最果て』終わりにして最果ての町ラトⅡフマタ、その向こうには何処までも広がる砂の海、曰く越えた者の居ない、曰く世界の果て、そんな風に称された砂漠の前に、アリシアの胸は高鳴った。その先には誰も知らない町があり、誰も知らない病がある、直感的に、そして経験的にそれを感じ、旅立ちを決意したのが知った翌日。大反対するウィルを強引に押し切り、前人未到の砂漠へと飛び込んで……この町に辿り付いたのが二日前。

——酷く困難な旅路だった、我ながら無茶をしたと思つ。

「……あの砂漠を越えろと言いだす時点で凄いです、本当に越えてしまふなんて」

「医療に不可能はありません、即ち、医者に不可能も無いのです」

「砂漠越えと医療は関係無いです」

「……」

「あ、や、その……で、でも！ 有言実行しちゃう先生は凄いです、憧れます！」

アリシアの無言、特に自分の発言に対して無言を返してきた時は要注意。ウィルの頭に刻み込まれたアリシアの『取扱説明書』には、第一にそれが載っている。

「……」

「ほ、僕も早く先生みたいになりたいなあつて思います、頑張ります、ええー！」

「私みたいに、ですか……その為には色々足りませんよ、ウィル」

「う……そりや、頭だつてまだ全然悪いですけど……」

「いえ、知識なんて足りなくて当然、それ以前の問題です」

「先生、それはそれで傷つきます」

控えめな主張を軽やかに無視、アリシアは睨みつけるようにウイルスを眺め、値踏みするように頷いた。「まず度胸、今の反応を見る限りではまだまだです、いざ重症の患者を前にして同じ反応をされたら話になりません、改めなさい」

「う……」

「次に自信、自分に不可能があると思つてるようではいけません、不可能など無いと思つこと、難病の患者を前にした時は自信の有無が重要です」

「あう……」

「最後に……自己犠牲、ですね」

「自己犠牲、ですか？」

「ええ、患者を救う為ならば己の全てを投げ打つ覚悟、致命的に足りませんね」

「そ、そうですか？ 確かに先生と比べれば足りないかもしれませんが、人並以上は覚悟だつてあるつもりです、他の二つより自信があります」

返答は溜息、その答えが不服なのか、不満気に見上げてくるウイルスに……アリシアは何かを思いついたかのような笑みを浮かべた。



「……分かりました、ではその有り余る自己犠牲の心を持ってして食料の買出しへと向かってください、お願いします」

しまった。身体全体で後悔を覚えながら、ウイルはがつくりと肩を落とす。

「うう……あんまりです先生、卑怯です、酷いです」

「……ウイル、私だって頼みたくて頼んでいるわけでは無いのですよ？」

「え？」

「本来なら医療品の買出しも頼みたいのですが、買出しは御使いと違います。店の品揃えと相談し、場合によっては想定外の代物を購入する事が有り得ます。ウイルでは何が入用かなど理解できないでしょう？ 言い付けられた品物以外は買えないでしょう？ だから其方の方は私自身で済ませます、薬瓶は重いですが、量も多いです、心の底からウイルに頼みたいのですが、残念ながら今のウイルでは……」

「ごめんなさいっ、僕が未熟でした！ 食料の買い物に向かいます！」

直立不動で敬礼を一つ、ウイルは左右を見回し商店町の方角を確認すると、アリンシアの『口撃』から逃げるように走り出した。

「……やれやれ」

「やれやれ」

曲がり角を一つ越えた先、ウイルは確実に声が聞こえないであろう場所まで駆け抜けてから、安堵の溜息を吐き出した。

——先生の言う事は正論だ、自分に知識が無い事は確かだし、そのせいで薬草や薬の買出しが出来ないのも事実。加えて、医療品は何気に重い、以前荷物持ちとして買出しに付き合った事があるが……正直、あの日の事は思い出したくない、それ程だ。そして、男の自分がそれだけ嫌がる分量を、先生一人で持ち運んでいけるのも事実であり……医療品を持ちながら食材を買うのも、その逆も重さ的に難しい。買出しを分担するのは必然、となれば……やはり、重たいほうを自分が担当するべきだろう、仮にも僕は男なんだ。

そんな風に思いながら、ウイルはぐつたりと項垂れた。幾ら決意だけ固めても、現時点でそれをこなすのは不可能だ、買出しが可能になるにはどれだけの知識が必要なのか、それを得るためにどれだけの本を読み、どれだけ学ぶ必要があるのかと……考えるだけで日が暮れそう、それに気づいてまた項垂れる。

役に立ちたい、それはウイルの本心だ。

——確かに、先生には意地の悪いところがある。天才故か性格故か行動も読めない、思考も無茶苦

茶、無理難題を言いつける事もあるし……先生は僕が場を混乱させると言うけれど、基本的に引つ掻き回すのは先生のほうだ、あの人は天才だから凡人の思考が分からない、すぐに人を怒らせる。基本的に莫迦は莫迦である事を指摘されるのを嫌うんだ、莫迦だから……手術や治療は得意でも、メンタル面への気遣いとか皆無だからなあ。

それはウイルの癖だった。単独行動を開始すると同時、様々な事を考える。普段は思考を一つの事柄に向けているが、一人の時はその真逆、思いつくままに思考を走らせ、抱いた疑問の答えを探す……主に抱く疑問、及び愚痴は、大抵アリシアの事なのだ。

それは好意であり、愛情であり、忠誠だ、全ては刷り込みに近い物だろう。ウイルは自分自身の感情を、そんな風に分析している。

ウイルには幼い頃の記憶が無い、そしてウイルは現時点でも十分に幼い。保有している極僅かな記憶。その全てがアリシアと共にある記憶であり、彼女は姉であり母であり、そして何より師であった。

——先生曰く、僕の名前はウイルネスⅡエンフィードと言うらしく、エンフィードの性は神の名で、僕は実験動物として生み出されて……ともかく、告げられた出生は、また子供だった僕には理解できない代物であり、理解出来た場合も余りにショッキング過ぎる過去だった。

世界は一つでは無い、時空は無限に連なり、それらは隣接し、並列し、縦列し、数えきれぬ混沌を紡いで廻る。連なり重なるその全て、それらを『世界』として統括し、超越者として存在すると伝えられる三千と二十九の神々、その中でも十七の位を持つエンフィードの眷属たる神狼。蒼紅、翠、金、銀、

五色の狼に人体を飲み込ませることで、神獣の力を宿した人間、及び人の意思を持った神獣を作り出す。

——神獣エンフライードプロジェクト。その、信じられない計画の副産物。研究者の懺悔が、希望が、そんな物が込められたのが僕なのだ、と、先生が告げた真実だ。

ウイルはその日を思い返すと、今でも笑みを浮かべてしまう。自分が作られた存在だ、そんな考えたくも無い現実を告げる時、そんな時でもアリシアは、ウイルが知るいつもの表情を浮かべ、いつもの調子で告げたのだ。

『ウイル、医者とは正直に、そして冷静で無くてはなりません、患者に病名を問われた時、嘘についてはなりません、取り乱すのも宜しくない、まっすぐ、はつきり前を見て、真実と気持ちを伝えるのです…病名を告げることは死刑宣告ではありません、その病気を治療するのが仕事です、私が貴方に告げた真実も絶望を与えるものではないのです。』

前を見なさい、貴方のその名が示すように、未来を見据えて生きなさい。過去は未来で打ち消すことができるのです、確かに貴方は作られた存在かもしれませんが、そんな事は関係無いのです、それならば貴方自身が、自らの手で、自分自身を作りなさい、誇れる人間になりなさい、自慢できる人間になりなさい、貴方自身が自分の価値を認められる人になりなさい、人の価値は生まれでは決まりません、どう生きたのかで決まるのです。

『ウイル、誇り高く、力強く、ただ真つ直ぐに生きなさい』

——と、しっかりと、はつきりと、今より幼い僕に告げたのだ。

僕が飲み込まれた神獣は白狼、限り無い純白、無垢、虚無——強さと弱さを兼ね備えた方ライイメージ、先生曰く何色にも染まるし、何色だって飲み込める、との事。

正直、今の自分だって全部を理解できるわけじゃない、当時の自分なら尚更だし、理解なんてできるわけ無いって事は先生だって分かった筈だ、それなのに、普段通りの振る舞いで、聞き慣れた語調そのままに全ての事実を隠さず告げた。その強過ぎるインパクトのお陰で言葉を忘れる事も無く、数年経った今でもその後が続いた言葉まではつきりと思いつける。

ちなみにその後が続いた言葉は『そして、医者とは嘔吐きでなければいけません』で始まるんだから驚きた。

『医者には正直でなくてはならない、嘔吐きでなければならぬ、患者に合わせるのが医者なのです、正直に告げて良好になるのなら堂々と、空気が回復を呼ぶなら嘔吐を吐く、癒すためなら如何なる手段も使います、それが医者です』

……本当、無茶苦茶だ。

『うわっ』

風が吹いた。ウィルは顔を押しさえながら立ち止まる。砂が入った目をごしごしと擦りながら思考を中断、昔を思い返すのは何時でもできる、今はとにかく買出しだ。まはたきを繰り返しながら考え、一歩前へと歩き出す。商店町は出口の真横、とりあえず大通りを南下すれば着く筈だ、道順を頭で反

芻し、痛みの消えた両の眼で前を見る。

「……あれ？」

良く目を凝らして見たからか、通りの先に何かある事に気が付いた。布に包まれた物体、此処からだ
と判断できないが、随分と大きいのが見て取れる。持ち主らしき人影は見えない……というか、先ほど
から人つ子一人見かけない。

人の居ない町に落ちてゐる荷物、ウィルは好奇心に任せて駆け寄ると、その布を捲つて中を……。

「うわっ！」

「……」

「え……ひ、人？」

一瞬たじろぎ深呼吸、見る限りまた息がある、混乱しながらもそれに気づいて安堵の吐息。

「……衰弱が激しい、旅人用の外衣……まさか砂漠越えを？ちよう、大丈夫ですか！」

力なく閉じられた両目、本当に砂漠を越えてきたとしたら、どれだけ衰弱していても驚かない。ウィ
ルは宿への道筋を思い返しなから、布から覗く顔を見た。——若い男だ、持病は無さそうだが栄養失調
が酷い、これは確実に砂漠越えだ。簡単な診察を済ませ、次の行動を頭に浮かべ……。

「……は」

「っ、気がつきましたか？大丈夫ですか？聞こえていますか？分かりますか？」

「は……ら……腹、減った」

「えっと……分かりました、食事ですね」

ウィルは男を持ち上げると、脳内で確認しておいた宿への道を駆け出した。まずは涼しいところに寝かして、食事はそれからの方が良いだろう、宿屋に何かあるだろうし、無いとしても寝かしてから調達すれば問題無い……今は移動する方が先決だ。

と、前方に注意を向けたその刹那、目の前の景色に違和感を覚える。

先ほどまで無かった物がそこに有る、通りの端に佇む物、違和感としか思えなかったそれが人である事に気づくまで一瞬の空白。黒一色の衣を纏った男だか女だかも分からぬ人の群れ。調度良かった、普段なら怪しいとしか思わない風貌の人を見て、安堵を覚えるウィルが居た。最も、それと同時に不気味だと感じた事も事実だが。

「すいません、どなたか水を分けて貰えませんか？」

「……………」

「急を要します、それとそのまま食べれる食料を売ってる店も教えていただければ……」

本能が警笛を鳴らす、慌てた様子が見られないのは町の場所を考えれば分からなくもない、辿り付くと同時に行き倒れる人間なんて珍しいものではないだろう。ただ……この反応は不気味としか思えない。

無視は良い、助けを求められたとしてそれに応じる義務は無い、無関心は人の常だ、その程度の反応に憤る段階は過ぎている。ただ……無反応は珍しい。目を逸らす、顔を背ける、無関心とはそういう事

だ。此方を黙って見つめ、近付くでも無く、避けるでも無く、無反応に在り続ける……その反応は異常だった。

「……あ、あの」

「……………」

「えーと……すいませんでした、もう良いです」

何かがおかしい、ウイルは音を立てて唾を飲み込むと、きよろきよろと周囲を見回した。宿舎は大通りを進めば辿り付くのだが……得体の知れぬ人の群れを突つ切る気にはなれない、迂回しよう。

「……外の者だ」

「え？」

「外の者だ、余所者だ、来訪者だ……」

「え、えつと……」

背筋が凍る、声に振り向けば背後にも人の影、例によつて纏つた服に隠れた表情は何えず、語る言葉だけが耳に届く——囲まれてる。

外の者？ 余所者？ それは抱えた男の事か、それとも自分についての事か、思考を走らせながら思い出す、自分達が来た時は極普通の反応が返された、活気が無いのは相変わらずだが、あの時はそれなりに人も居て……そもそも、ここまで完全に顔を隠した人間は居なかつた。

そこまで回想し、不信感を抱くと同時に、ソレは動き出した。

「うわっ！」

「……」

一瞬早く察知し左へ避ける、自分が居た場所を貫いた手斧に戦慄を覚えながら走り出す。音も無く駆け出す人の群れ、その手には各々武器を持ち……自分達を狙っている、間違いない。

「な、何をするんですかつ！」

「……」

走りながら問いかけるも答えは手斧、足元を狙ったそれを回避すると、ウィルは駆け出す速度を上げた。道なら路地裏に至るまで暗記済み、町の人間が相手でも逃げ切れる自信は充分ある。加えてこの男達が町の人間とは思えない、気配が違っ——そもそも人間であるかさへ分らない。が、なんにせよ逃げ切れる勝算なら充分だ。

「話し合う余地が無いなら、逃げるまでです」

言い捨て、もう一段階速度を上げる。黄金色の砂を巻き上げながら、ウィルは乳白の町を駆け抜けた。

†

「……遅い」

ネヴァアリアは市場が独特だ。東側に食料を集中させ、西側に雑貨諸々を配置して、順当に巡った場合大通りにて合流する。食材のついでに、雑貨のついでに、そんな思考への配慮は無い、求める物を求める時だけ買えばいい、そういう思念を元に作られた都市計画なのだろうと分析して、アリシアは溜息を吐き出した。

市場を逆順に回るなかれ、師に教えられた事柄であり、ウイルにもそれは教えてある。商店の並びに理由があるとは師の言葉だ、入り口には軽い物、出口には重い物や保存に気をつけなくてはならぬ物、その通りに配置されてる町もあれば、無視している町もあった。この町の場合には……これだけ神経質に区分けする程だ、セオリー通りの並びである事が見るまでも無くわかるし、現にその通りの並びだった。それ故に、ウイルとの待ち合わせは市場出口の大通りだと決めてある。そして、その場所に待機してから早二時間、とつぐに買い物を終えているだろうウイルは未だ姿を現さない。

「……」

——幾らなんでも遅すぎた。五分の遅刻は溜息、十分で睨み、三十分で説教と決めているが……一時間を超えた場合日は話が違ふ。

買い物に一時間以上費やさぬように、幾つか定めた約束事の一つだ。それを破つてまで買い物を続ける、及び買い物開始から二時間連絡が無い場合日は何らかのトラブルに巻き込まれた、それを想定して行動に移ると決めている。

そこで考えると、アリシアは口元だけで微笑んだ。相手の状態を想定して行動、いつのまにかそんな

事をする程の仲になったのか、出会った直後は思ってもいなかった現状に驚きと、なんとも言い難い複雑な感情を抱いて一つ溜息。

『この子は何も無いの、希望なの』

友人の言葉を回想する。

『私は間違っていたのかもしれない、人が神獣を宿すだなんて傲慢な望みなのかもしれない、でも……神眷属に過ぎぬ存在が、人として生きたいと願う気持ちなら、なんとなくだけでも分かるから。』

この子は空白、人並の能力、人間の感情、その対極たる神獣の能力は、ずっと奥深い所に眠っている……彼がそれを望むなら目覚める事もあるけれど、その影響を受ける事だけはありえない。

限り無く人に近い、人としか呼べない空白よ……人と言う純白、神の色に染まるか、神を人で染めるか、それを知る者は何処にも居ない、この子はこの子のまま、白獣と言う存在だけが、人に姿を変えたのよ』

その言葉の正否は分からない、今のウィルが元々存在した人間の意志なのかも、白狼という存在がどのように作用しているのかも、医学を超えた次元に在った事柄は流石に理解できなかった。最も、その後の流れこそ理解する事が出来ないが。

成り行き、とでも言うのだろうか。気が付けば王国騎士団に追われていた彼女に代わり、私が育てる事になった。乳児で無かったのは幸いだが、幼児と言っても過言では無い年頃だ。

『育てるも捨てるも好きなように、貴女なら大丈夫だって信じてる』

彼女はそんな風に微笑みながら、私達の前から姿を消した。もう一度出会う事があつたなら散々文句を言つてやろう、あの頃はそんな風に思つていた。子供は苦手だつたから……そもそも、身体専門の医者である私は精神的な面を得意としない、感情、理性、あらゆる意味で危うい幼年期の少年を育成するなほまつたくもつて自信が無く、知識も無く、勿論、経験だつて無かつたのだ。

どうすれば良いかと悩んだ拳句、まず教えたのが彼の出生。それと出来る限りの助言を少々。

後は勝手に見つけてくれればそれでいい、私の旅はそれなりに過酷だ、目的の達成は困難だし、それ故に子供を育てる余裕も無い。——それよりも、育てるべき物があるのだから。代々伝わる万能なる靈薬、『エリクシル』と呼ばれるソレを完璧な形に『育てる』と……自分の指名を思い出しアリスは静かに首を振つた。この子が自分についてくる事はありえない、いずれ自分の道を見つけ、私から離れていくだろう。そんな風に思いながら、一人旅を初めても問題が無いよう最低限の知識を授け……何故こんなことになつたのか、気が付けば、ウイルは医者を目指し、私の傍に今も居る。

「本当、なんでこんな事になつたのやら」

——そして、今も昔も、ウイルはトラブルを呼び込むのだ。

ある時はそのフォローで駆け回り、ある時は要らぬ損害を被り、苦労ばかりとは言わないが、それなりに労力を費やされる事が多々あつた。今回もきつと、それなりに忙しい一日となるだろう。

「む……何処に行つた」

「ん？」

眩きに振り向いて見れば人影が二つ、声から察するに男だろうか、外衣を纏っているで表情までは伺えない。

そういえば、今日はまた『普通には』人の姿を見ていなかった。

アリスアは今までの数時間を回想すると、溜息を一つ吐き出した。本当——この町は人間以外が多すぎる。

「ふむ、動ける体では無かったと思うが……ん？」

「……」

逸らすのが一瞬遅れたか、目が欠けたことを悔やみながら、アリスアは声の主を眺め見た。黒い衣は砂避けにして日避け、声の感じとその風貌から砂漠を越えてきた後なのだろう——この町の連中とは種類が違う。

「失礼、この辺りで男を見なかったか？」

「男、ですか……今日人に出会ったのは貴方達一人が初めてです、見かけてません」

「そうか……すまない、手間をかけたな」

一札する男に札を返してを気づく、視界の隅に映るもう一つの人影、それが一瞬よめいた。

「……失礼ですが、お連れの方は何処か具合でも？」

「ん？……いや、大丈夫だとは思うが」

「……」

「大丈夫ですか？寒気はありませんか？……声は聞こえますか？」

「多分だが聞こえていると思う、返事を返すことが少ないだけだ」

「……」

ぐらりと揺らめく。

異変に気づいたアリシアが手を伸ばすと同時、影はバランスを崩し倒れ掛かり、アリシアの手に身を預けた。

「なる……おい、大丈夫か」

「大丈夫だと思う、ですか……間の抜けた健康管理だ」と

外衣の隙間から手を差し込む、体温の高さと異常なまでの発汗、震えている事を確認してアリシアは焦りと怒りを覚えた。先ほどまで治療していた熱病とは症状が違う、新たに調合する必要があるそうだが、それが焦りを覚えた理由。

そしてもう一つ、怒りを覚えたその訳は……。

「こんな子供を連れて砂漠越えですか、ふざけているとしか思えません」

小柄過ぎる人影が、少女であった事だった。

体験版はここまでです。

発行

二〇〇五年八月十四日

初版発行

二〇一〇年四月十二日

データ版発行

著者

三根崎優介

イラスト

夜月星

発行元

熊月温泉

メールアドレス

y-mine@olive.freemail.ne.jp

URL

<http://kumaduki.s145.xrea.com/>

印刷製本

株式会社ポプルス

本書内容の無断複写、転載を禁止します。